

平成 30 年 5 月 9 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02911

研究課題名(和文) 西北周縁領域の歴史的展開からみた中国古代史の再構築に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on Reconstructing the History of Ancient China on the Basis of Historical Developments in the Northwest Frontier Regions

研究代表者

高村 武幸 (TAKAMURA, TAKEYUKI)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：90571547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題においては、中国古代史を再構築していく試みの一環として、西北周縁領域の歴史的展開が中国古代史にどのような影響を与えたのかを研究した。そのため文字史料の検討結果の基盤の上に、古代中国の中核地域からみて西北に位置する地域の遺跡の立地を実見・検討した。その結果、戦国時代の秦における西北周縁の異民族集団との交通の要衝には長城に加えて大規模な複合的施設が存在し、秦が西北周縁を想像以上に重視していたことが明らかとなった。また漢代に至っても、西北周縁が中核地域との人的・経済的なつながりを持っており、中国古代史を再構築する上で西北周縁との関連性をより重視せねばならないことを解明した。

研究成果の概要(英文)：We have studied the influence of historical developments in the northwest frontier regions on the history of ancient China as one contribution to reconstructing ancient Chinese history. In this process we have examined historical texts and investigated relevant physical sites. As a result, the existence of important large-scale gathering place facilities for interactions between the Han Chinese and non-Han tribal groups existed in the northwest border regions during the Warring States Qin dynasty period clarifies that the Qin valued this northwest frontier area much more than imagined. Further, during the Han dynasty, the northwest region had important people and economic connections with the central region, and thus we clarified that the northwest frontier region is important for our reconstruction of the history of ancient China.

研究分野：中国古代史

キーワード：中国古代 周縁 秦・漢 秦・漢帝国 西北周縁

1. 研究開始当初の背景

秦・漢帝国が、多様な広大な領域をどのように支配しようとしたのか、その成否はどうであったのかは、中国古代史の中でも国内外で重要な研究テーマとなっている。各地域の特色に注目した地域史の他、近年、我が国においては前漢前半期(前2世紀前半)における東(間接支配)・西(直轄支配)地域の支配方法の違い、また前漢後半期～後漢期(前2世紀後期～後3世紀初)の北方辺境地域と内地地域の役割分担、といったテーマが議論され、重要な成果を挙げている。

一方、秦・漢帝国の領域は固定していたわけではなく、時期によって拡大・縮小があった。特に西北辺境は、戦国(前5～前3世紀)秦の領域拡大過程とともに変化し、始皇帝の統一期から前漢前半期にかけて一度、変動が停止する。その後、前漢武帝期(前2世紀中葉～前1世紀初)の領域拡大により再度の大きな変動を経て、現在の山西省西部～甘粛省西部に至る西北周縁領域の枠組が確定した。ただしこの枠組も、異民族勢力の盛衰により相当の影響を受けることとなる。

以上のような事実関係の大枠自体は、『史記』・『漢書』・『後漢書』など正史の記述から、従来も認識されてきたが、実際の研究に眼を向けると、居延漢簡などの出土史料の関係から、前漢後半期における現在の甘粛省西部(内モンゴル自治区の一部を含む)を中心とした研究が多く、その前後の時期や、他の西北地域についての研究は少ないのが現状である。しかし、西北周縁領域は秦・前漢の政治的中心地である、関中盆地(陝西省中心部)に隣接しており、中国東方地域と向き合わねばならない秦や前漢のような関中を基盤とする政権にとっては後背地にあたる。この後背地の安定は関中の政権にとって極めて重要であったはずであり、戦国秦の勃興と統一、前漢の統一維持と中央政府の支配力強化といった中国古代の歴史過程の展開は、西北周縁領域の歴史的状況の展開過程とも対照しつつ、甘粛西部や前漢後半期に限定せずに検討される必要がある。

さらに、漢は秦から制度をはじめ多くのものを継承しており、特に周縁領域統治については、「中国王朝—異民族」という図式にされやすく、周縁領域統治や異民族との関係は、秦・漢を連続したものと捉えて考察することが主流であった。しかしながら、最近公表された「里耶秦簡」をはじめとする秦の新出史料を漢代史料と比較すると、漢代と秦代とではその内実かなりの差が存在しているのである。すなわち、連続性に加え、秦から漢に継承されなかったものにも眼を向けた歴史過程の考察を実施せねばならないことが浮き彫りとなってきている。例えば秦では戦国期のかなり晩期まで、主要都市の付近に「異民族」と認識される集団が存在しており、「周縁領域」というものが意識の上でも実際の存在形態としても、前漢はもとより統一秦とも大きく異なっていた可能性に目を向けた検討を必要としよう。

以上の点から、中国古代史の展開を、関中を基盤とした秦・漢両王朝の異同に留意しつつ、西北周縁領域のそれとの関連の元で再検証していく研究の必要性が理解されるであろう。本研究計画はこうした背景のもとで立案されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、山西省西部～甘粛省西部に至る、中国戦国秦漢時代における西北周縁領域の変遷と、それが中国古代史の歴史的展開に与えた影響とを、典籍文献史料にみられる歴史過程の大枠を踏まえた上で、新出の出土史料や考古学・歴史地理学成果(遺跡・遺物研究)を積極的に活用して解明することを目的とする。このために、下記のような個別具体的研究目標を複数設定し、それらの結果を総合する方式を採用する。

A、西北周縁の歴史地理研究…戦国期から後漢にいたるまでの西北周縁領域について、都市や長城、墓葬など、各種古代遺跡の分布状況を、時期や文化の異同に留意しつつ精査し、西北周縁領域の各地が政治的・文化的に中国古代王朝の

周縁領域として組みこまれた時期を確定していく。その際に、各種の地理環境条件の与えた影響も勘案していく。これにより、文献史料の中央中心的な観点を除去した周縁領域の変遷史を構築する。その上で、そこに築かれた地域社会の状況も明らかにする。

B、西北周縁統治の制度史・政治史的研究…秦から漢が受け継いだものの代表は各種制度であるが、実際に戦国秦から後漢に至るまでの間に、制度も運用もかなりの変容がある。そこで、西北周縁領域の統治にかかわる各種制度や行政的措置を検討し、それらの継承と断絶の有無、運用の相違や変容の実態を明らかにする。併せて、それらと、通常「周縁」とはみなされない地域等で運用されていた制度との関連性や差異の有無をも考察する。

C、「周縁」認識の研究…「周縁」は「中核」または「内地」との物理的遠近によってのみ規定されるわけではない。中国古代の人々が、「周縁」をどのように捉え、理解したか、そしてそれが時期や王朝によってどのように変化していた(いなかった)かは、実際の制度や政治運営にまで影響していたと考えられる。そこで、古代史史料にみえる言説や法規範などから、当該時代人の周縁認識のありかたや、またその意識が現実の歴史過程に与えた影響について考察する。

3. 研究の方法

3-1 史料に基づく研究

前掲の目的を達成するために、本研究に関連する典籍文献史料・新出出土史料を探し出し、正確に読解して考察を加える、という地道な研究作業の継続が必須となる。そのために、各参加者が自己の担当する研究に関わる史料を体系的に収集・整理した。この収集・整理にあたっては、研究者としての実績豊富な研究協力者の助力を受け、悉皆的収集と、後の研究に有効な整理が可能になるように留意して実施した。あわせて関連先行研究の収集を実施し、最新の研究動向を本研究計画に反映するよう努めた。

この収集・整理を経た史料や先行研究を軸に、各自が専門領域を生かした基礎的個別研究を実施していった。また各自の個別具体的研究の進捗状況・成果を共有し、各自の個別研究の深化に利用し、共同の目標達成に寄与させることとした。

3-2 現地踏査

史料に基づく研究と並行して、西北周縁領域の中でもあまり研究が進んでいない、甘肅省東部～山西省西部方面の中から、複数の遺跡を選択して戦国～漢末遺跡の現地踏査を実施することとし、限られた時間内で効率的な踏査を可能とするため、当該遺跡にかんする報告書・先行研究を研究協力者らの助力を得て分担して収集の上、検討を加えておき、その成果を研究会の席上で共有した。

実際の踏査の際には、遺跡本体に加えて、近隣の博物館等に収蔵されている出土遺物や、周辺の地形を確認することで、複合的な視点から遺跡の評価を行なった。それらの成果を史料研究の成果と照合し、史料の伝える状況との異同を確認した。

現地踏査としては、以下の二回を実施した。

2016年度：甘肅省東部～寧夏回族自治区

周代における秦の勃興の地であると同時に、秦の発展に伴って西北周縁領域としての性質を持つていくこととなった甘肅省東部を中心に、戦国秦の西北周縁として交通の要衝でもあった寧夏回族自治区固原を踏査した。

2017年度：内モンゴル自治区～寧夏回族自治区

戦国時代後半から漢代にかけて遊牧民との角逐の場となった内モンゴル自治区西部から、寧夏回族自治区固原までを踏査した。

4. 研究成果

文献史料と現地踏査を組み合わせる研究を実施した結果、以下のような成果を得た。

4-1 甘肅東部

甘肅東部においては、文献史料に「西垂」と記された礼県を訪れ、同地の遺跡並びに遺物を調査することで、周辺をいわゆる「西戎」系勢力に囲

まれ、自らも「西戎」の出身とされる秦の国家形成期の状況を検討した(1)。

周王朝を中心的な存在とする「中原」的な視点からすれば「周縁」の一勢力に過ぎなかった秦が、周とのかかわりを利用しつつ自らを中心的存在と位置づけ、近隣の「戎狄」勢力を討伐・勢力下に置き、かつての周王朝の故地である関中盆地(陝西省)へ進出していく過程の出発点として、礼泉の位置は歴史地理学的に重要であることが明らかとなった。すなわち礼泉の位置と交通路が関中盆地と交通を保ちつつ、一定の距離をも有している点があげられる。周の権威を利用しつつ、周辺の勢力を支配下に入れて独自の勢力圏を形成するには適した条件といえよう。このことが、秦をして周とのかかわりを維持しつつ勢力を拡大せしめた要因となったと考えられるのである。

さらに、戦国期にも甘肅省東部を勢力圏に入れていたことは、牧畜民・遊牧民勢力などのかかわりを維持し、軍馬や騎兵戦力の確保にもつながったと考えられる。甘肅省東部では、急峻な山地上に戦国秦長城が設置されており、甘肅東部地域の確保に尽力していたことがうかがえた。これについては、秦・前漢が関中盆地を基盤とする政権で、それより東方の地域に対して対立あるいは支配するという構図からいえば、後背地の甘肅東部を安定させる必要があるのは当然だが、秦・前漢がそうした防衛的な発想しか有していなかったとは考えられない。後に制度的に秦から多くを継承した前漢でも、王朝の主力騎兵戦力の中核が甘肅東部～寧夏南部の出身者で占められていたことが文献史料から判明しているが(2)、この地域は長期間にわたり、関中盆地を本拠とする王朝の軍事的基盤として機能したと考えねばならない。

4-2 寧夏回族自治区

寧夏回族自治区の固原長城は、関中盆地から涇水を経由して清水河沿いに北上し、黄河を渡河し西域へ向かうルート上にある。この長城の近傍には、大小の城郭遺跡が存在しており、中には後世の漢代玉門関にある玉門都尉府遺跡と大体同規模

の城郭もあった(3)。実見した限りでは、長城は後世の改変を経ているようであるが(4)、玉門都尉府遺跡と近似する城郭遺跡の周辺の地表には戦国～漢代のものと思われる土器片が大量に落ちており、後世(特に宋・明)の改変が加えられていないと考えられる。とすれば、戦国秦において、後の前漢後半期以降の敦煌・玉門関や陽関と同様の機能を果たすような防衛兼交通管理機構が設置されていた可能性を示唆する。

このことは、同時に踏査した瓦亭付近で、烏氏倮といわれる人物が「戎王」と交易をして莫大な財をなし、始皇帝に厚遇されたという文献史料と密接に関係する(5)。六盤山麓に位置する瓦亭は、後世に至るまでモンゴル方面の遊牧民と中原王朝との交通路一時には進撃路一として機能した固原と関中を結ぶルート上、涇水を経由して清水河に至るための結節点に位置する。瓦亭から少し北、漢代朝那県付近に蕭関という関所が存在し、武帝以前に西北との接点になっていたことが知られ、この一帯が戦略的要地であることは疑いない。この戦略的重要性は、東西交易(絹馬・絹玉など)のもたらす経済的利益ともかかわり、戦国秦の軍事・経済的基盤を考察する上で重要な観点だろう。

以上の点から考えると、寧夏回族自治区南部、陝西省や甘肅省と境を接する一帯は、関中盆地を本拠地とする戦国秦や武帝期までの前漢にとっては、単なる関中防衛の対象としての周縁なのではなく、むしろ周縁ならではの特色ゆえに経済・軍事的な面で重視されたといえるだろう。

4-3 内モンゴル自治区

内モンゴルのフフホトから包頭については、戦国趙・秦・前漢の長城ラインをまず取り上げて検討した。この地域は東西に延びる陰山山脈に沿って長城が建設され、その南方に戦国趙・秦・漢の城郭都市が散在する地域である。戦国趙の長城ラインは秦・漢に受け継がれ、漢の北方拡大に伴い第二次防衛ラインとなったようである(6)。

先行研究では、戦国趙の長城について漢代の河西回廊の長城と同一視し、異民族の侵入監視と防

止の機能を重視するものがあつた(7)。しかし、その立地を観察すると監視には必ずしも適さず、むしろ陰山山脈の山間部において交通路を管制する機能が重視され、必ずしも漢代河西の長城線と同様に考える必要性はないこととなる(8)。このことは、長城をすべて均質な機能を持つ長大な線として捉える発想に根本的な転換を迫る。

バヤンノール付近では、戦国趙から漢にかけての長城線に設置された軍事施設遺跡と、その内側に位置した漢代の開拓地を実見した。

軍事施設はいずれも陰山山脈西南部(狼山)の山の中腹に位置し、山間から流れ出る河川の流路に沿って進攻する敵対勢力を効率よく監視・抑制できる一方、広がる漢代の開拓地を一望のもとに見渡せる、軍事的に絶好の位置にある。

これらの軍事施設のうち、布列毛徳城(漢代軍事施設)については、ほとんど人の手が加わっていない状態であつた。構造としては内モンゴル自治区エチナ旗に所在する甲渠候官遺跡と酷似しており、候官(辺境防衛機構の中級指揮所)クラスの機構が設置されていたと考えられる(9)。この遺跡の北東に、鶏鹿塞遺跡・高闕塞遺跡があるが、いずれも同様の大きさである。

以上の点から、漢代において辺境防衛機構と施設については、北辺ではほぼ一律のものをを用いていた一方、地域によってその重視される機能には差があり、河西では比較的平坦な地形の故に線的な異民族の侵入監視・防備に、陰山山脈ではそれに加えて交通路を管制下においたのである。

漢は異民族から得た土地に、農耕が可能であれば移民を送り込んで都市を建設することで、外敵からの防衛と増大する人口の調整弁としての役割を負わせた。ただし、それは一方通行的な拡大ばかりではなく、時には縮小も伴うものであつたことが、バヤンノールの沙金套海故城を実見し、文献史料などとも突きあわせた検討からみえてきた。

以上、踏査結果と文献史料等の記載を軸に考察を重ねてきた。多くの研究者が「辺境」と認識してきた西北周縁領域は、戦国秦・前漢にとっては

本拠地たる関中盆地の周縁に位置するという意味においては「辺境」である。しかし、のちに統一秦・漢の領域として組み込まれた東方地域も、戦国期においては周縁と認識されたのではないか。

後の秦による統一とその直轄支配領域を前提とする視点、あるいは漢字で記された文献史料からは、西北周縁領域は東方に拡大する関中政権にとっては後背地ということになり、そこから勢力を拡大した秦は「辺境から伸長してきた勢力」という捉え方になるであろう。しかし、本研究で明らかにしてきたように、そこは単なる「辺境」ではなく、秦が周王朝との関係を適度に維持しつつ独自の勢力を伸展させるには好適の地であつた。また秦が自ら関中政権化してより以降は、軍事的・経済的利益をもたらした、戦国時代に有力国としての秦の地位を固めるのに必要な地域でもあつた。

秦の始皇帝による北方遠征・漢の武帝による河西回廊～西域への進攻は、戦国期から前漢前期において関中政権が無用な摩擦を回避しつつ国力の維持のために西北周縁領域を安定した後背地として利用して東方領域(=従来の視点では中国の中心部を含む)を支配下におさめ、一定の安定を得たのちに、今度は東方を安定した後背地として、西北へ勢力を伸展させようと試みた動きと理解することができよう。無論、文化的にみて、関中政権と東方領域の親和性は西北周縁領域やさらにその向こうに広がる地域と比べれば極めて強い。しかし、関中政権としての秦・漢という視点でみた場合、西北周縁領域と「関東」、すなわち東方領域が、いずれも周縁性を帯びており、関中政権はいずれかが安定して支配下にあればもう一方に進出する、という認識は必要不可欠なものではないか。こうした視点から中国古代の歴史的展開を再構築する上で、西北周縁領域の重要性は等閑視できないことを明らかにした。

注

(1) 秦の勢力拡大過程については、吉本道雅「秦一戦国中期以前」(『中国先秦史の研究』下篇第三章、京都大学学術出版会、2005年[初出1995・

1998・2003])を参照。

(2) 高村武幸「漢代の材官・騎士の身分と官吏任用資格」(『漢代の地方官吏と地域社会』第一部第二章、汲古書院、2008年〔初出2004〕)。

(3) 片野竜太郎「漢代辺郡の都尉府と防衛線—長城防衛線遺構の基礎的研究—」(靱山明・佐藤信編『文献と遺物の境界—中国出土簡牘史料の生態的研究—』六一書房、2011年)。

(4) 彭曦『戦国秦長城考察と研究』(江蘇鳳凰科学技術出版社、2017年、初版1990年)の指摘、及び衛星写真と実地踏査を組み合わせた研究を行っている研究協力者の森谷一樹氏の指摘による。

(5) 松田寿男「絹馬交易と『禺氏の玉』—最古のシルク・ロードについて—」(『東西文化の交流I』松田寿男著作集第3巻、六興出版、1987年〔初出1967〕)。

(6) 例えば国家文物局主編『中国文物地図集 内蒙古自治区分冊』(西安地図出版社、2003年)によれば、「秦漢長城」とされる長城線が陰山山脈北方に存在する。

(7) 柿沼陽平「戦国趙武霊王の諸改革」(『日本秦漢史研究』13、2013年)。

(8) 漢代河西の長城線の機能については、簡便には靱山明『漢帝国と辺境社会—長城の風景—』(中公新書、1999年)を参照。

(9) 遺構の大きさからそこに存在した機構が推測可能な点については、前掲注(3)片野論考参照。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 鈴木直美「秦簡にみえる働く少年・少女—世帯内部の多様性と社会的流動性理解への一助として—」『法史学研究会会報』第21号、2018年、2~13頁

2. 高村武幸「肩水金閼を往来した人々と前漢後半期の辺郡・内郡」『東洋学報』第99巻第3号、2017年、1~34頁

3. 渡邊英幸「戦国秦の国境を越えた人々—嶽麓秦簡『為獄等状』の「邦亡」と「帰義」を中心に—」高村武幸編『周縁領域からみた秦漢帝国』六一書房、2017年、3~24頁

4. 鈴木直美「漢代フロンティア形成者のプロフィール—居延漢簡・肩水金閼漢簡にみる卒の年齢に着目して—」高村武幸編『周縁領域からみた秦漢帝国』六一書房、2017年、157~172頁

5. 高村武幸「書評 鷹取祐司著『秦漢官文書の基礎的研究』」『日本秦漢史研究』第17号、2016年、198~209頁

6. 高村武幸「新刊紹介 簡牘整理小組『居延漢簡 卷』」『明大アジア史論集』第20号、2015年、83~87頁

[学会発表] (計2件)

1. 渡邊英幸「戦国秦の内史と郡県制」(第6届出土文献青年学者論壇、2017年〔招待講演・国際学会])

2. 渡邊英幸「秦統一前後の「邦」と畿内」(東洋史研究会、2016年〔招待講演])

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高村武幸 (TAKAMURA Takeyuki)
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：90571547

(2) 研究分担者

渡邊英幸 (WATANABE Hideyuki)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：00615502

(3) 連携研究者

鈴木直美 (SUZUKI Naomi)
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：50643962

(4) 研究協力者

青木俊介 (AOKI Shunsuke)
学習院大学・国際センター・PD共同研究員

飯田祥子 (IIDA Sachiko)
龍谷大学・文学部・講師

廣瀬薫雄 (HIROSE Kunio)
復旦大学(中国)・出土文献と古文字研究中心・副研究員

目黒杏子 (MEGURO Kyoko)
京都大学・人文科学研究所・特定助教

森谷一樹 (MORIYA Kazuki)
前 人民大学(中国)・講師

鷺尾裕子 (WASHIO Yuko)
立命館大学・文学部・講師